

現代の急須

— 四年後の魅力 —

常滑焼を代表するやきものの一つである「急須」は、お茶を淹れる道具であると同時に、大切に育てる茶道具でもあります。現在、とこなめ陶の森には江戸時代後期から平成時代につくられた常滑の急須を約200点収蔵しています。なかでも明治時代につくられた名工の急須は、長期にわたって使用することで、土の色が変わり、つやのあるものへと変化していきます。こういった現象を「時代を帯びる」、「道具が育つ」などと表現し、収集家によって珍重されてきました。

当企画展は、この「大切に育てる」を研究テーマに掲げ、未使用の急須と現在使用している急須を並べて展示しています。これは2018年に常滑で活躍する作家19名に急須を2点（一組）制作していただいたもので、内1点を、煎茶道賣茶流家元 高取友仙窟氏の元で4年間使用していただきました。

特に変化がみられたのは、村越風月氏が制作した朱泥急須です。村越氏の朱泥土は、水籬と呼ばれる昔ながらの丁寧な仕事でつくられています。4年間の使用で、光沢とともに鮮やかな朱色から深い朱色へと育っています。

次に注目されるのは、谷川仁氏が制作した梨皮手藻掛急須です。谷川氏は田土に砂まじりの粘土を混ぜた陶土を使用しています。ガス窯で焼成する際、窯の煙道部からガスバーナーで赤火を送り、炭化した黒い雰囲気仕上げています。藻掛はアマモと呼ばれる海草を巻き付けて焼成する技法で、海草に残るわずかな塩分が赤色に、海草の部分は金色に発色します。本作は道具が育つことで、藻掛の発色が際立ち、より愛らしい道具となっています。



村越 風月 作 常滑朱泥急須（左：未使用、右：使用后） 谷川 仁 作 梨皮手藻掛急須（左：未使用、右：使用后）

今回の展示のなかには、土の雰囲気が大きく変わった急須や、逆に変化の起こりにくいものもありました。しかし、小さな変化であるからこそ、急須にみられる土の魅力を感じ、大切に育てていくことにつながります。当企画展を通じて、長く使われてきた急須の裏側にある人々の思いや日々の暮らしの中で道具を大切に育てていく意義を感じていただければ幸いです。

さいごに、当企画展の趣旨にご賛同いただきました常滑の作家の皆様、煎茶道賣茶流の皆様感謝申し上げます。

（とこなめ陶の森 小栗康寛）



協力…煎茶道賣茶流

2022.
10.15(土) - 12.27(火)
9:00-17:00 休館日：月曜日（祝日の場合は翌日） 入場無料

学芸員による **ギャラリートーク**
日時 | 1回目：10月15日(土) 13:30～
2回目：10月29日(土) 13:30～
会場 | 陶芸研究所 展示室

常滑で活躍する作家 19名の急須



山田 想作
朱泥急須



村越 風月作
常滑朱泥急須



平沼 秀祐作
焼締め急須



清水 小北條作
焼締窯変急須



鯉江 廣作
窯変黒急須



伊藤 雅風作
梨皮泥急須



山田 勇太朗作
焼締急須



村田 益規作
朱泥たたき急須



水野 博司作
南蛮急須



谷川 仁作
梨皮手藻かけ急須



小西 洋平作
真焼菊形急須



小山 乃文彦作
粉引急須



四代山田 常山作
朱泥糸目急須



水野 陽景作
烏泥南蛮急須



清水 北條作
焼締藻掛急須



大澤 哲哉作
黒チャラ急須



中川 貴了作
焼メ急須



都築 豊作
焼メ急須